

『下野新聞』の関東大震災報道——第一四師団の動向を中心として——

内田 修道

はじめに

『下野新聞』は大正一二年（一九二三）九月七日付二面に、震災救援のため出動した栃木県青年団の報告書を掲載した（資料一）。

（見出し）

帰来した青年団状況報告

（本文）

本県青年団が東京震災救助の爲め既報の如く出発し、大に努力し帰省したが、活動状況は左の如くである。

第一班

第一班は宇梶属引率で九月二日河内並に宇都宮青年団は午後六時二十五分宮駅出発し小山駅に下車し、汽車不通の爲め徒歩で荒川鉄橋を涉り、三日午前二時岩淵に到着、夜営した。然るに同地に鮮人が既に浸入し、暴動起り、軍隊の活動で二十余名を逮捕、現行犯二名を銃殺し、尚数名の潜伏の模様ありしを以て、一同嚴重に警戒徹宵した。当時東京は一面紅空を呈し時々銃声や爆発の音がドンと聞え物凄く、午前五時一同出発、徒歩で赤羽王子間にさしかかるや、警備の軍隊より宣告があつた。王子から東京は鮮人盛んに暴行を働きつつあり、若し鮮人を発見した時はぶち殺せと命じた。尚井戸の水に毒薬投入されあるから一切飲むなと命じた。依つて第一班青年団は準備を整へ日暮里到着、宇梶属は青年団三名を引き連れ内務省社会局で打合せをなした結果、東京市の指揮を受け第一班本部を社会局に置き宿泊し、三日午後九時東京市の命により鮮人の警備の任に当たつ

た。下谷区は河内郡八十四名、小石川の警備は下都賀四十八と宇都宮廿七名が当てられ、続いて牛込の警戒は塩谷安蘇を合せ三十五名の配置、本郷区は那須二十一名芳賀三十三名が警備した。牛込下谷当りは青年団抜剣し、実弾を打ちつつ警備した。青年団には別段の異常なく四日午前十時頃引上げて帰郷の途についた。

第二班

第二班、戸恒属の引率で六百十八名四日到着し、第一班の残り」と第二班と合併し東京市の命令で上野公園自治会館下谷仮区役所となつてゐる。避難民の炊出しを行つてゐる。鮮人の警戒、日本橋、京橋、神田死体の整理を分担して之に従事したが、死体は電車道路に振出しあり、腸は出で凄惨を極めて居るのを整理し、上野公園に引上げ、而して夜自治会館の警護に當つた。警備は鉄の棒を以て鮮人に備ふるのであるが、鮮人襲来の爲め警官は折々消灯を命じ、自治会館を包囲して之を警備するのである。上野公園は罹災者が至る処にさまよいつつあるが、避難民中折々前途を悲観して毎晩首くくりをなして死するもの多数に上るとの事である。

（引用資料の傍線は内田が付した。また句読点は適宜付した。以下同。）

（資料一）で注目すべきは、青年団に対し軍隊が朝鮮人の暴動を「既成事実」として朝鮮人殺害を命令していることである。この「既成事実」として軍隊が列挙した事例は、「暴動」であり、「毒」の井戸への投入である。そして警備隊が組織され、銃で武装までしていることである。

栃木県の青年団が軍隊から突きつけられた「既成事実」を『下野

新聞」はどのように報道したのか。同紙は二日以降東京へ特派員を写真班とともに派遣した。そして九月四日以降の紙面に次々と東京からの記事を掲載した。本稿の目的は「下野新聞」の記者たちが震災の現状をどのようにみていたのか、そして青年団が突きつけられた「既成事実」をどのように取り上げたかを検証することである。

第一四師団に関する注目すべきことは、(資料1)と同じ七日付三面に掲載した第一四師団参謀長井染祿朗大佐の談話である(資料2)。

(見出し)

### 今回の不逞鮮人の行動

社会主義者とロシア過激派の三角関係を根幹に行はる

怪しと睨んだ裏面の事実

(本文)

今回の不逞鮮人の行動其他に就いて第十四師団参謀課長井染大佐は左の如く發表した。

「今度の不逞鮮人の不逞行為に就ては当初よりその背後に何等かの勢力があつて之が糸を操つて居るのであらうと考察して居たが、果して日を逐ふに従ふて若干の事実が発見されて来た。即ち今回の不逞鮮人の不逞行為の裏には、社会主義者やロシアの過激派が大なる関係を有する様である。社会主義者の計画は支那人並に鮮人を煽動して、不逞の挙動並に不徳なる行動を為さしめ、治安を紊し、官憲が大災厄に遭遇して、ここに奔命して居るを幸ひとして、官憲の無力を宣伝し、盛んに不穩当なる流言蜚語を放ち、各種奇怪極まる浮説を宣伝せしめ、官憲の不信を流説し、官憲と民人との間に対抗の勢力をつくらんことを策する一方、鮮人を煽動して不逞行為を為さしめ、内乱暴動を全国に波及せしめて以て一挙に彼等の希望する極端なる民主政治を実現せんとたくらんだのである。而して右の計画に就てはある時機に於てこれを実行するの考えがあつたものであるが、そ

れが今度の大災厄を幸ひとして急速になされた模様である。又鮮人の計画は秩序あり、系統あり、組織的のもので、その準備も稍完全に近きものあつた様である。これに就てこれを証明すべき幾多の事実が既に発見され、某重要方面に於て確信を得たものである。彼等の財源は言ふまでもなく上海にその根源を有するが、ロシアである模様の過激派からとりいれて、ロシアの過激派と不逞鮮人との間には余程密接なる連絡がある様だ。神戸付近にロシア過激派の購買組合があるが、彼等がここを本拠として上海との連絡を取つて居る事実があり、ヨツフエ氏滞在中に於てもロシアの過激派と社会主義者と不逞鮮人との間にある連絡があつた様に思ふ。要するに今回不逞行為はこの三者の三角関係を根幹として行はれたもので、こは疑ひなき所である。斯様にして右の事実が漸次判明したので、東京付近では一般民衆の社会主義者に対する激昂の情がたかまり、同時に主義者に近き者、若しくは輕妄なる新思想家に対する民衆の反感が漸次昂まりつつある模様で当師団より派遣したる某大尉はこの情況見聞して歸つて来た。

次に田端付近の近況に就てであるが、何分にも多数の救援隊がドシドシ災害現場に乗り込み頻々として汽車で往復して居るので大混雑を来し、却て罹災民を輸送し得ざる状態にあるからこれ等は余程民に於て考慮して欲しい。尚十四師団出動迅速なりましたため警備のために非常なる効果を齎して居る。糧食輸送も亦極めて有効に輸送せられ深川本所方面への罹災民へ食糧を給した事になつて居る。要するに当師団の迅速なる出動が必要なる時機に於て必要なる勢力を災害地に齎した事は欣幸とする処である。」云々

〔資料2〕は、既に姜徳相・琴秉洞編「現代史資料6 関東大震災と朝鮮人」三五七頁(a) (みすず書房、一九六三年。以下「現史6」とする。)に収録され、さらに関東大震災五〇周年朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会・調査委員会編「歴史の真実―関東大震災

と朝鮮人虐殺―(現代史出版会、一九七五年)二三九頁(b)に収録されている。しかし、この両著とも資料の重要部分が省略改変され、その上で収録したことが記されていない。(資料1)の傍線部分が省略改変された処であるが、(イ)の処は、史料それ自体が文意が不明瞭になつてゐるので、文意を損ねるようには改変されていない。問題は(ロ)の部分である。a・bともに「模様である」と書き換え、しかも「当師団より派遣したる某大尉はこの情況見聞して帰つて来た」以下を消去してゐるのである。bにおいてはこの史料に「軍人の予断と虚報」という位置づけが与えられてゐる。私が注目するのは、この部分に第一四師団幹部の「作為」を読み取つたからである。シベリア出兵においてゲリラとの戦いで手酷い辛酸をなめ、最後に尼港事件を体験し、社会主義者に対する激しい憎悪を有してゐた彼らの「作為」が感じられるからである。本稿の目的の第二はこの「作為」がいかなるものであつたのかを「下野新聞」の報道記事を検討することによって明らかにしようとするところにある(1)。

## 一 報道の実際

―特派員たちは震災の実情をどのように伝え、紙上にはどのような掲載されたか―(2)

なぜかマイクロフィルム版の『下野新聞』には一日から三日までが欠けており、四日付から収録されている。四日付紙面のトップに掲載されたのが次の記事である(資料3)。

(見出し)

不逞鮮人各所に潜入

危険極りなく警備隊は軍隊と共同逮捕に努む

警備隊は武器を携へ合言葉を使用し

不逞鮮人を発見せば呼子の笛で合図す

(本文)

▲牛込四谷麻布小石川本郷田端王子西巢鴨板橋杯の各市街に二日夜に至り多数の不逞鮮人潜入したりと(a)其筋より警告ありたるより、右市街地居住民は直に警備隊を組織しこれが逮捕に努力しつ、あるが、何分にも電灯はなく暗夜の爲め逮捕は困難からず、爲めに人心益々不安の状にあり、

▲王子駅付近に於ては某料理店の裏かげに約四十名の鮮人集団し劃策しつ、あるを警備隊に於て発見、直に同駅付近警戒中の(b)騎兵隊に報じたるより十数名の騎兵隊これを追撃し格闘の末遂に約二十名を捕へたるが、之等の鮮人は(c)缶詰に類した爆弾様のものを所持し居たり、

▲小石川伝通院より西巢鴨池袋一帯より板橋街道に至る沿道は陸続たる避難民のため一大混雑を呈し暗濶として名状し難き折柄(d)不逞鮮人多数入り込み井戸に毒薬を投じ石油を屋上に注ぎ放火を爲すの恐れあれば、住民は直に警備隊を組織すべしとの戒告ありたるより、一人心一層不安の状に陥りたるも、(e)協力して直に多数の警備隊を組織し、久堅町大塚仲町養育院前等に於て約数十名の鮮人を引き捉ひ、一々嚴重なる身体検査を施し官憲の手に之を引渡し、或は興奮したる警備隊自ら適當の膺懲を加へ専ら放火の厄を免れんと努力しつ、あるを散見したり、又巢鴨監獄横水窪には従来多数の鮮人居住し居る關係上、最も危険区域と看做されつ、ありしが、俄然二日夜に入り(f)右警備隊により六尺豊なる巨漢を初め数十名の鮮人を逮捕したり、又一日本婦人らしき者松田と書ける提灯を携へ巧に内地人の風を装ひ、多数の不逞鮮人を交へ、辛辣なる行動を開始せんとしたるを直に発見され、厄一百名の在郷軍人青年団之れを追撃したるも午後十時迄に逮捕するに至らず、因みに警備隊は棍棒鉄棒等の各武器を携へ合言葉を使用、不逞鮮人を発見するや呼子の笛を以て警備隊員を召集し、之れを逮捕する等其の行動極めて敏活を極めつ、あり、なお右方面には(g)騎兵砲兵等

乗馬で出動し警戒怠りなく、前日來の奮闘に困憊し居るを以て  
宇都宮六十六高崎十五の両連隊の応援を求む

この記事で注目すべきは、第一に「不逞」朝鮮人の潜入したこと  
を「事実」として「その筋よりの警告」で牛込・四谷・麻布・小石  
川・本郷・田端・王子・西巢鴨・板橋などに警備隊が組織され（a）、  
王子駅では、「缶詰に類した爆弾様のものの所持」した「不逞」朝  
鮮人が騎兵隊に捕らえられ（c）、井戸への毒薬投入、石油を使つ  
た放火の「恐れ」を理由として「其筋より警告」や「戒告」によつ  
て警備隊が組織されたことを伝えている（d）。このことは、冒頭  
で前述した栃木青年団に対しては軍隊が朝鮮人の暴動を「既成事実」  
として命令していることとは異なっている。ここでは「恐れ」とい  
う反乱の可能性を理由として警備隊を組織しているのである。記者  
は「その筋」から得た情報をそのまま事実として肯定し「不逞」行  
為を記事にしている。第二にeに見るように警備隊が捕らえた朝鮮  
人に対し「適當の懲罰」＝リンチを加えている様子を直接みて記事  
にし、しかもその行為を肯定的にとらえているが、朝鮮人が武装し  
反乱を起こしている事実を記者は実際に確認していない。また、f  
では、火災に追われ飢えに苦しみ逃げまどう被災者たちがうごめく  
なかで、このような場面はあり得ない作り話であることは明白であ  
ろう。この資料に登場しているbやgの騎兵や砲兵は第一師団が  
到着する前なので近衛師団の兵士であろう。

次の〈資料4〉は、〈資料3〉と同じ一面に掲載された現地の状  
況を伝える記事で、見出しはセンサーショナルだか、本文は〈資料  
3〉とはかなり異なっている。

（見出し）

不逞鮮人等は麦酒瓶に

石油を詰め家屋に

撒布して放火する

目的は大官と財産家

（本文）

（a）小石川牛込の両区は、小石川は被害割合に輕微、特に小  
石川は昨夜（二日）十時迄は砲兵丁廠付近の一部、区役所付近  
の一部音羽の一部が一日焼失したる外、未だ焼失区域を見ず、  
目下猛火は微南風に煽られて上野広小路より本郷台に向つて漸  
次本郷区及び小石川区を包圍しつゝ、あるが、果して小石川区ま  
で延焼するや否や、目下の所油断し難きも大体に於て本郷区で  
喰止めるのではないかと一般に言はれて居た。

（b）伝通院より音羽辻町街道約一里に渡る電車道路には、避  
難民芋虫の如く横たはり、其両側は警備隊を以て非常線を張り  
一々通行人を誰何するのも見えた、又電車道路を中心とし左右  
の町々の露地横町等には在郷軍人で組織された警備隊員が仕込  
杖を持ち不審の挙動ある男は一々誰何し、若し明答が出来んと  
立所に十数名の同隊員が集まり来たりて袋打にすると言ふすさ  
ましい光景を現して居る、記者が美濃部博士邸の付近を歩行中、  
暗にするとき呼子の笛を聞きたりと思ふと忽ち三十名ばかりの  
警備隊が馳せ来たり、不逞鮮人一名が此の区間に於て姿を没し  
たり、多分此の家の内に忍び込んだのであらうと口々に叫びな  
がら猿の如く十数名の壮漢が柵を乗り越え不逞鮮人何処にあり  
と猛烈な勢ひで飛び込んだが結局逮捕し得なかつたので、隊員  
等は忽ち伝令を發して、注意せよ鮮人行つたと付近一帯に蜘蛛  
の巣の如く非常線を張つた、更に（c）大塚仲町付近に於て五  
名の鮮人を引つ捕へ巡查四名、之に警備隊員十数名が加はり、  
嚴重なる服装検査を行ひ、所持品を取り調べ、其の使用目的を  
尋ねてたが、氣早の青年等は「遣つ付ろ」と口々に絶叫して居  
つた、（d）尚鮮人犯行に就て某一市吏員の語る所に依れば彼  
等はビール瓶に石油を詰め之を目的とする付近の家屋に撒布し  
以て放火を敢へてなすと言ふ、而も其の巧妙なる又彼等の結束  
固く、彼等が狙はんとする家は旧家か乃至は財産家か若くは大  
官の宅であるらしく、若し火を放つ際には目差す所の付近数ヶ



所一度に放火すると言ふ云々

この記事は a でまず火災の状況を正確に伝え、b では在郷軍人で組織された警備隊によつて行われている朝鮮人狩りの「すさまじい光景」を描写的に伝え、c では巡査に警備員が加わつて朝鮮人に対する厳しい尋問と検査が行われ、興奮した警備員が今にもリンチを加えようとしている緊迫した様子を伝えてゐる。そして、d では朝鮮人の犯行に関して「某市吏員の語るところ」として石油による放火を伝えている。犯行説の情報源を明確に示し、伝聞であることを明確にしている。編集部がこの伝聞をあたかも事実であるように見出しをつけているのである。

〔資料5〕は四日付であるが三面に掲載された記事である。

〔見出し〕

流石繁華を誇りし帝都も

古の武蔵野原其儘となり

山の手方面に僅の人家を望むに過ぎず

荒川より川口駅迄人の川を作る

〔本文〕

東京市内主要地に焼け残つた上野広小路付近は、二日午後二時頃泉町方面から延焼忽ち下谷区役所を舐め尽し、岩倉鉄道学校を焼き一時下火となつたが、強風起り再燃し、いとう松坂屋を始め都館並池の端付近料理芸妓屋等一面の火の海と化し、三日午前二時頃迄猛火を漲らし、上野山上から全市街を見渡すと、浅草の観音、湯島の天神中央駅等の建造物を認むるのみで他は昔の武蔵野ヶ原そのまゝの状態に陥り、山の手方面に僅かの人家を望むに過ぎない。尚赤坂溜池付近は工兵隊が出動、家屋を取壊し、防火に努めてゐる。又、『栃木県地方は強震なし避難せよ』と掲載したビラが市内各要所に張り出されてあるため、上野方面の避難者は続々と赤羽を経て川口町方面に入り込み、三日正午頃は同町付近に集まつた避難者と見舞者が十万人の多

数に達し、荒川の渡から川口駅迄は人の川が作られ、発車毎に列車の屋根上にまで無数の乗客を数へ、駅員の制止は何等効なく、女子供の踏み倒されて泣き叫ぶ物凄いな声が各所に起り、凄惨の氣に満ち満ちてゐた。

火災の現状を伝えるとともに、少し時間がずれているが、第一四師団の兵士や栃木県青年団が通過した川口、赤羽の騒然とした状況を伝えている。とくに市内各所に張り出された『栃木県地方は強震なし避難せよ』と書かれたビラによつて避難者が川口方面に殺到した事情が明らかにされている。この記事では朝鮮人の反乱や警備隊や軍の動向は一切ふれていない。

〔資料6〕は翌五日付一面に掲載された記事である。

〔見出し〕

食料品の供給

幾百万の罹災人を

救済し得るや

国家は昏睡状態に陥る

〔本文〕

大東京の火災は全く予想以上の大自然の威力に依る。東京は日本心の臓部だが、其の心臓部は全く破壊された。行政経済交通通信の中枢機関は根底的に破壊し尽された。此の破壊し去られた心臓を持ち我日本は現在全く休眠状態に置かれた。九月一日を期し日本は昏睡状態に陥つたのである。斯く科学文明の粹を集めて其幾多の機関完備に恵まれて漸く建設膨張し來つた大東京が一瞬にして破壊され総ての統一秩序は破れて一大混乱に陥つたのであるから、混乱の様は名状しがたいものである。斯く総ての機関に依つて東京の住民数百万の飲料は円滑に供給されて來たのであるから、此の交通機関の一大破壊に伴つて飲食料物の供給は全く途絶し、其上在庫品各戸の貯蔵物も総て灰燼に歸したのであるし、し然も其等の罹災民数十万宛が各広場に

避難して喪心の態で居るのであるから、此等に飲食料物の供給は即ち罹災民の救済は切羽詰まった重大緊急問題である。只一つに近県の自動車等を以て近県の助力を得、此れ等の問題を解決せんと当局は奔走して居る。果して是が円滑に出来るかどうか、(a) 二日の如き罹災民は各広場に避難し、漸く狼狽の鎮静するにつれて疲労空腹を痛感し初めて災害地外部の各地に向つて飲食料物を得るべく猛烈なる大襲撃を行へる為大騒擾起り、遂に憲兵抜剣して此れを防止するの不幸事を惹起した。全く数百万の罹災民は最初避難せる場合は「何にかして呉れるであろう」との他動的なりしも、其後愈々空腹を覚ゆるにつれて「何うにかせねばならぬ」との自動的に移つたものなれば現在是最も危険な状態にありと謂はねばならない。当局の必死奔走と自動車等の交通機関が果して此れ等の需要を満たし得るか、今東京罹災民の心理状態を見るに恰度数名の子供が何事か必死となつて喧嘩しつゝ、ある最中霹靂の大雷鳴と猛然たる降雨に逢つて呆然自失したると等しく、最も激烈に名利に争闘しつゝ、あつた大東京が一瞬の大地震と大火災とに逢ひ、着の身着の儘となつて逃出し、一瞬前の各種の階級は全く一掃されて何人も一様の木阿弥と化し去り喪心自失の状態で、只如何にして命を維持するかかの原始的に還つたのである。右様の始末で警察官も総て数十時間の奮闘に疲労し切り、無秩序の混乱裡に此の原始的罹災民に満たされてゐるのであるから、此の数日飲食料物の供給に全力を注ぎ、此に満足を与へなかつたなら、由々敷大問題を惹起するやも測り難い。(b) 此れ等の関係と不逞鮮人に関する

流言等より此の秩序を恢復するべく第十四師団まで東京に出動して戒厳令を二日夜より行ふに至つたのである。例へ大困難なりとしても官民協力に全力を傾注し、此れ等の不幸事惹起する事無き様努むる事が緊急の問題と思はれる(二日夜特派員)

この記事は二日の夜に書かれている。にもかかわらず、(資料3)や(資料4)とは異なり、避難民がいかなる状況におかれているの

かを論じ、避難民が飢餓に襲われ、暴動状態にいたる「最も危険な状態」であることを明らかにし、今何が必要なかを提起しているのである。そしてaで明らかになように飲食料物を得るべく猛烈なる大襲撃を行い、大騒擾が各地に発生し、ついに憲兵が抜剣して防止する不幸事が発生したことを明らかにしているのである。そして、bで、この食料暴動のような秩序紊乱を回復するため戒厳令が施行され、第一四師団までが出動することになつたとしているのである。

(資料3)の記者と異なり、食糧暴動の實際を把握しているため「不逞」朝鮮人侵入説や放火、掠奪をデマとしてとらえている。「現史6」(一五九、六〇頁)に「福島民友新聞」九月四日付の左の記事が地方紙流言記事として収録されている。

#### 食料争奪開始

##### 憲兵抜剣し鎮撫に努む

東京は飲食物欠乏の爲め飲食物の争奪行はれ憲兵が抜剣して之が鎮撫して居る其中には朝鮮人の一隊が飲食物欠乏のために暴動をおこしたるものなりと

食料暴動が朝鮮人暴動と結びつけられ、しかも伝聞として報道されている。しかしながら、軍が流した朝鮮人の「不逞」行為とは、実は下野記者が指摘する各地に起きた食料暴動のことではないのか。食料暴動が軍によつて朝鮮人の「不逞」行為と読み換えられたのではないか。そして火災から逃げまどい、飢えを凌ごうとしている朝鮮人を積極的に殺害し、それを「既成事実」すなわち、放火・掠奪・反乱を起こしているゆえに射殺した朝鮮人というニュースを発し続けたのではないか。栃木県青年団が体験したのはまさにこの「既成事実」作りの最中ではなかつたのか。

## 二 報道と物語

「下野新聞」の震災報道は、(資料3)でみたような記者自身取材し、東京の現状を報告する記事だけでなく、センセーシヨナ

ルな朝鮮人の反乱とそれへの対応記事が掲載されている。

#### 四日付

1 「大森方面に於て不逞鮮人隊と我歩兵小隊と戦闘開始」二日午後七時特派員発。

2 「東海道方面は数百の鮮人群をなして武器を携へ避難民を襲撃しつつあり」二日午後十時。

3 「三河島方面より不逞鮮人が二百名押寄せ」三日朝三時。

4 「検拵した鮮人約二百名 殺したものの六十名」日時なし。

5 「大塚火薬庫付近で不逞鮮人と青年団格闘 火薬庫を爆破の陰謀」二日夜 丸の内方面。

6 「大久保で鮮人が井戸に毒を投じ二百名死亡、倉庫を襲ひ金庫を破壊」日時なし。

7 「救助より防火あり、不逞鮮人の検拵、爆弾の音絶えず」日時なし。

8 「不逞鮮人疲労し死物狂ひとなる  
三日午後三時発 不逞鮮人は疲労と食料欠乏の為め今夜辺り死物狂となり暴動を起す恐れあり」と

#### 五日付

1 「県内に於ける鮮人（中略）不逞の行動を取りたるもの一名も無しと当局は言明したり」四日夜 宇都宮発。

2 「現状視察記」吉原遊郭、浅草公園、丸の内、呉服橋、深川の状況。三日午後三時。

3 「山谷の彼方に銃声聞ゆ」三日午前 福島県某技士談。

4 「東京地方裁判所構内で二名の不逞鮮人発見、数個爆弾所持」三日午後。

5 「今回の不逞鮮人の系統は上海及間島

◇今秋を期して秩序破壊の

◇行動に出づる所を今回の

震災を機会に勃発

某々方面に於て今回の不逞鮮人の暴挙に就き觀察せる処に依れば、その系統は上海及間島の不逞鮮人にして予てより今秋挙行せ

らるる○○○○○當日を期して秩序破壊の行動に出づる予定なりしを、はからずも今回の震災を機会とし這般の行動に及びたる極めて憎むべき性質に属するを以て当局に於ては徹底的に不逞鮮人を絶滅する方針らしいと云ふ。ダイナマイト及拳銃其他の武器の系統に就いては詳かならざるも多分露国製のものなりと云ふ」日時なし。

6 「挙動不審の看護婦の帽子から爆弾発見（前略）富坂署に引致（中略）厳刑に処したり」三日午前 小石川富坂町。

#### 六日付

1 「四名の不逞鮮人列車を爆破せんとし捕はる、一名は逃走赤羽駅の出来事」四日午後二十分。

2 「誰何を受ける事十数回に及び漸く東京に入る 四日帰宮の石田氏語る」

3 「横浜付近の惨状 海水浴客外九百名不明 麻布連隊警戒 現時実見者談」日時なし。

4 「熊谷町の町端で逃走せんとする不逞鮮人が壮士に斬殺さる」四日夜 特派員発。

5 「流言蜚語に惑はぬ様にと本県警察部の急告」五日 管下各警察署宛。

6 「警察権を尊重せよ、不逞鮮人の後には社会主義者ありと 師団長の話」五日午後 朝久野師団長談。

7 「鮮人の暗号」特派員報。

これらの記事で特徴的な事は、まず、「不逞」朝鮮人の反乱・暴動記事の発信時日が二日から三日にかけて集中していることである。また、記者が「不逞」行為や武器を実見していない。こうした情報が一般的な流言ではなく、軍の「作為」であることは間違いないであろう。しかし、中央から流されるニュースが第一四師団のお膝元宇都宮では虚報であることが、警察の調べで次々明らかになつていった（五日付の1）。また、四日付の8にみられるように、主語さえ入れ替えば、（資料6）で明らかにされた罹災民の「危険

な状態」と全く同じであることがわかる。

そうした状況と相前後して五日付の5と六日付の6・7にみられるように韓国独立運動の拠点が置かれた上海、閩島とそれを支援するロシアの社会主義者と今回の朝鮮人の「不逞」行為（軍によって作り出された「既成事実」）を結びつける物語が報道記事に盛り込まれているのである。その作者は「某某方面」と云っているが、一四師団の幹部とみてよいのではないか。

### 三 「主義者」摘発の論理

#### —シベリア出兵の遺産・結びにかえて—

前述したように師団幹部による「作為」は冒頭で引用したように参謀長談話となつて結実する。その物語作成が師団から派遣された「某々大尉」の東京での行動にあつたのではないだろうか。

師団幹部の創作が可能となつたのは、シベリア出兵軍に同行し、現地でのゲリラとの戦闘を連日のように送り続け、尼港事件を目的の当たりに見た従軍記者の存在である。彼らは軍幹部と密接な関係を持つており、同社のなかでも重要な位置を占めていたと思われる。左記の資料は（資料2）で紹介した参謀長談話（二面）を報じた七日付の一面の社説のすぐ下に下に掲載されたコラムである。

その日その日

#### （前略）

鮮人が火をつけたから、こんな大火になつたんだと避難者のどれも彼れもが云ふ。だから鮮人は皆殺しにして終へと教へる。各駅には棍棒やトビクチや太刀を携へた勇敢な人々が鮮人は見付け次第殺してゐる。だが惜しい事には彼等の一人も社会主義者を捕へようとしない。社会主義者は同胞を一人も焼き殺しはしなかつたのか。

◇ ◇

昔高麗百済が神功皇后に叛逆した時に背後には、シラギがあり、

支那大国があつた筈だ。今度の鮮人の放火を、我國の社会主義者が後援してゐた事を少しも気付かなかつたか。

鮮人は歴史的にみても独り歩きの出来ない人間どもである事を我々は知ると共に社会主義者との関係を考へねばならない。

◇ ◇

同胞に同胞を裏切り或は売つたものは、我國の社会主義者であつた。鮮人狩りに次いで来る可きものは社会主義者狩りでなくてはならない。

◇ ◇

どんな社会主義者でも個々の人間にはなんの恨みも呪も持つてゐない筈だ。決して人間そのもの、虚無は願ふてゐない筈だつた。夫がどうであるか。今度の東京市の大火に際して同胞を殺し、同胞を売つたのは社会主義者ではないか。日本の社会主義者は明らかに国民の、同胞の人間の虚無を願ひ、国民全体の敵となつた。来る可き日本人の覚悟は彼等人間其の其のもの、虚無の実現を目的とする主義者の一団を一掃する事であらねばならない。

◇ ◇

青年団員も在郷軍人も亦巡查も駅員も民衆も同胞の皮をカブつてゐる主義者をつつけよ。彼の犯した罪悪は鮮人以上であるかも知れないぞ。

社会主義者に対する激しい憎悪、コラムがアジテーシヨンの場と化しているのである。同じ社内に（資料6）で見た伶俐な目をもつた記者もいれば、このような反社会主義の鬼と化した様な記者も存在するのである。

（資料2）でみた参謀長談話では、社会主義者摘発に樂觀的な見方を示しているが、実際はそうのように進行しなかつた。

次の資料は九日付で報じられた帝国在郷軍人会宇都宮支部長の訓辞である。

(見出し)

## 在郷軍人に訓示

(本文)

今回帝都付近の震災に対する在郷軍人会の活動に関し、帝国在郷軍人会宇都宮支部長は左の如き訓示を發したり

### 訓示

今次帝都付近未曾有大惨害の報伝へらる、や、各分会翕然奮起し、犠牲的行動に出で会員一致協力、寢食を忘れ救済の事業に熱誠従事せられつ、あるは頗る欣快に絶へず、且各位の勞に對し満腔の誠意を以て感謝の意を表する所なり、此の際に於ける各分会活動の準備に關しては曩に指示するところありたるも、尚現下の現況に鑑み、特に茲に諸官の注意を喚起せんとす。仄聞する處に依れば、彼の不逞鮮人に対する反感憎惡の余憤は、牽いて順良無辜の鮮人に及び、往々鮮人に向直に残忍なる制裁を加へ、加之内地人にして鮮人と誤認せられ不測の奇禍に遭遇したるものあり、就中地方警備秩序に任ずる団体員にして、猥りに凶器を携へ却つて暴行の□□となり或は行動の節制を欠き、ために人心を不安に導き、益々民心を刺激昂奮せしめ、今や社会秩序紊亂の端を為さんとす、之元より一部の訛伝に過ぎざるべしと雖、若し果たして事実とせば誠に遺憾に堪へざる所なり、抑も不逞鮮人の暴行は□人共に許す能はざる所なりと雖、鮮人必ずしも悉く不逞にあらず、彼等も亦等しく我帝国の臣民にして、其純朴なるものにして寧ろ此際進んで同情救護を與へ彼等をして益々感謝の念を増さしむるは国家百年の大計に□ふ所以にして、之に反し徒らに無辜の鮮民を虐くるが如きは實に邦家の将来に一大禍根を残すに過ぎざるものとす、我会員諸子宜しく慎重考慮し濫りに無節制なる団体の妄動に付和することなく、往事訓練の眞価を發揮し、嚴に輕拳を戒め、節制ある行動を以て自ら範を世に示し、加て之が善導に任ずるの□なかるへからず、而して此際特に注意すべきは人員の出勤を必要

の限度に止め、区署を明確にし、以て会員統制に遺憾なからしめ、且彼の猥りに武器の類を携帯するか如きは嚴に之を戒めざるべからず、

(a) 諸子よ刮目せよ、彼の残虐なる不逞鮮人の背後には某主義者の使喚煽動あるあり、而して之れが事實は、彼の逮捕鮮人の自由を徴するも明らかなるのみならず、若し夫れ惨害場裡自動車を駆つて憐むへき罹災者を蹂躪し、所々に爆弾を投じ、火を放ち、資財を掠め、食を奪ひたるは勿論、或は避難民の群に石油を注ぎ、火を投じ、或は生残者の依つて以て一縷の生命を繋ぎつ、ある誰一の井水に毒を投じ、或は救護員を裝ふて飢渴の窮民に毒物を勧めたるは必しも不逞鮮人のみにあらざるのみならず、往々妙齡の日本婦人を交へたるものすらありと云ふに至りては蓋し思半ばに過ぐるものあらん

(b) 噫今次帝都の惨状を聞くもの誰れか涙なきを得んや、然るに等しく生を我国に稟けながら啻に同情の涙なきのみならず、未曾有の災厄に苦しめる我が同胞に加ふるに更に此の残虐を以てす、其凶惡憎みても尚余りあり、今や主義者の使喚に迷はされたる無知の鮮人に対しては国民の反感其極に達し、余憤往々純良の鮮人に迄及ばんとするものあるに反し、之れが主動たり実体たる彼主義者に対しては敢て慷慨の聲あるを聞かざるは真に吾人の遺憾に堪へざる處なり、之れ元より諸報道尚詳ならざるものある亦其一因たりと雖、庶幾は我在郷軍人各位宜しく前陳の実証に鑑み、此の如き主義思想の俱に天を許さざるものなることを銘肝し、愈々堅確なる思想を堅持して以て郷党をして絶対に主義者を排斥するの氣概を高□せしめんことに一段の努力を望む

右訓示す

大正十二年九月

帝国在郷軍人会宇都宮支部長 齋藤泰治

前半こそ過剰警備による一般朝鮮人への危害を戒めているが、後半は、軍が創作した「不逞」朝鮮人の犯行を並び立て、「不逞」朝鮮人の背後に「主義者」がいることを指摘し(a)、この「主義者」に国民大衆が気づいていない。その原因は新聞が詳しく報道しないからだと言及し、在郷軍人が率先して在住する町村から「主義者」を排斥しなければならぬと力説している(b)。冒頭に紹介した七日付の第一四師団参謀長の談話とあわせ見るとき、そこには第一四師団幹部がもくろんだ社会主義者摘発の論理が凝縮されていると見てよいのではないか。そして、この社会主義者摘発の論理こそシベリア出兵で彼らが背負い込んだ重い遺産であった。この遺産を背負い込んだのは軍だけではなかった。『下野新聞』も一四師団がシベリア出兵のさなか八年十一月陸軍大臣田中義一の増兵論を批判していた。しかし、シベリアの酷い体験を経験してきた従軍記者が軍同様の遺産を背負い込んでいることは、七日付のコラムに色濃く表れていた。

注

- (1) 『鹿沼市史 通史編 近現代』第3部 第1章 第4節 シベリア出兵・関東大震災と鹿沼」を参照。なお、植山淳「関東大震災直後の軍隊と警察―戒厳令に関する一考察」(『京浜歴科研年報』一四号、二〇〇一年一月) 参照。
- (2) 山岸秀は「関東大震災と朝鮮人虐殺80年後の徹底検証」(早稲田出版、二〇〇二年九月) 六五頁で「報道態勢に支障をきたさなかつた地方新聞社はしかし、逆に真実の報道なく、流言を検証せずにそのまま報道した。その地方報道が東京に貫流し流言をさらに煽った。」と述べているが、地方紙をどのような手続きで検証したのか、本稿を見る通り疑問を呈せざるを得ない。

「付記」

なお、本稿を作成するにあたり、鹿沼市史編さん委員会近現代史部会の皆様にご教示をえました。室所蔵のマイクロフィルムを使用させて頂きました。

『京浜歴科研年報』バックナンバー

『京浜歴科研年報』第一八号

(二〇〇六年二月一日発行)

〈京浜歴史科学研究会創立二〇周年記念講演〉

自由民権運動の再考

―民権一二〇周年を迎えて新しい切り口が見えるか―

新井勝紘

〈論 文〉

開国後の漂流民の帰国について

―八幡丸の勇之助を例に―

鈴木由子

野村靖の国家論

大湖賢一

Local Leadership in the Kawasaki Region

From Bakumatsu to Meiji Neil L. Waters / 訳者香川雄一

〈研究ノート〉

勘定吟味役・設楽八三郎の周辺

倉田純一

〈紀行文〉

幕末長州紀行

―二〇〇五年、広島・山口紀行(抄)―

伊東清風